

総説

医学中央雑誌からみた在宅看護領域における在宅療養者を対象とした研究動向と今後の課題

和田庸平¹⁾ 尾原喜美子²⁾

(高知大学大学院総合人間自然科学研究科看護学専攻修士課程¹⁾)

高知大学教育研究部医療学系看護学部門²⁾)

The research trend and issue for home care patient in home nursing by using
Ichushi-web

Yohei Wada¹⁾ Kimiko Ohara²⁾

(Kochi University Graduate School of synthetic human natural science research for Nursing¹⁾)

Kochi University Research and Education of Nursing Division in medical course²⁾)

要 旨

在宅看護領域における研究動向と今後の課題を明らかにするために文献研究を行った。医学中央雑誌 Web 版を使用し、2000年から2010年の間に発表された在宅看護で検索される抄録のある原著論文1,122件を対象とした。研究数は2002年より増加しており、対象別には看護師を対象とした研究が突出して多く、今後は在宅療養者や家族を対象とした研究の充実が望まれた。在宅療養者を対象とした研究は、提供されているサービスの実態や効果を調べたものが多く、在宅療養者へのケアの質を高めるための要因や生活の質の構造を明らかにする研究が求められていることが示唆された。

キーワード：在宅看護、在宅療養者、対象別

Abstract

The purpose of this study was to research the trend and issue in home nursing, by using the Ichushi-web. The subjects are from 1122 original articles with abstract that were published from the year 2000 to 2010. Research has increased since 2002. However, the number of studies aimed on nurses were considerably large. Future research studies on home care patients and their families are needed. In addition, studies based on home care patients are mainly about service contents and effectiveness. The issue is to reveal the factors which improve the quality of nursing and the quality of home care patient's life.

Keywords: home nursing, home care patient

受付日：2011年6月30日 受理日：2011年9月28日

【緒 言】

我が国では、少子・高齢化に経済の低成長が重なり、社会保障費の財政・経済への圧迫は極度のものになってきている。また、医療技術の進歩、生活環境の変化により疾病構造も急性・感染症中心から慢性・生活習慣病へと変化している。それとともに、インターネットやテレビ、ラジオを介して多くの人々が専門的な知識を得られる機会が増え、患者が自ら利用するサービスや治療の選択を求めるようになり患者の権利の尊重が重要視されるようになった。このような中で、疾病予防の重視、入院期間の短縮、在宅医療の推進、延命医療の選択、医療サービス、介護サービスの多様化、多層化が推し進められ患者の選択幅が拡充するなど、社会保障の在り方は大きく変化していった。

社会保障の変革の一つである在宅医療の推進は、1987年に厚生省の「国民医療総合対策本部」の中間報告の中で地域ケアシステムの推進とともに示された。それに伴い、看護の分野では1991年の老人保健法等の一部を改正する法律により老人訪問看護制度が創設され、在宅の寝たきり高齢者に対して主治医の指示に基づき、看護サービスが提供されるようになった。また、1994年には健康保険法等の一部を改正する法律により訪問看護制度が創設され、疾病・負傷などにより老人医療受給対象者以外の在宅で療養が必要な者に対しても看護サービスの提供が行われるようになった。そして2000年4月には介護保険法が施行され、現在では多くの人々が訪問看護サービスなどの様々なサービスを利用しながら在宅で生活を送るようになってきている。

これらの在宅療養者への看護について清水¹⁾は、対象者の意思や価値観に配慮することの重要性を説明している。さらに、療養者への周囲の環境や時間的な経過などにも広げ

て療養者の生活を理解し、また療養者の機能低下や障害に着目するだけでなく家族も含めどのような生活を送りたいかについても情報収集しアセスメントをする必要があること、さらに看護計画の立案や実施の際には、社会資源の活用や他職種との連携なども考慮することで、対象者1人ひとりの生活に適応した看護過程が展開できることを説明している。

研究者も在宅分野で働いていた経験があり、在宅療養者を支援するには療養者自身の意思や思いを十分に話し合っていくとともに介護の中心を担う家族とも関係を深め、家族の気持ちも尊重していくことの大切さを認識し支援を行っていた。また、訪問介護やケアマネージャー、往診医などの他職種と連携を行い、利用できるサービスの情報を提供するなど多様な面での働きを行っていた。それと同時に、はたして今の自分の行っている支援は在宅療養者の意思に添えているのだろうかと感じたり、他職種との連携はどのようにすればよいのだろうかとの疑問を感じた。

このような在宅看護が抱える課題から、在宅看護領域における研究にはどのようなものが行われているのかと関心をもつようになった。しかし、在宅看護領域における研究が年次別にどのように推移しているか、どのような人や物を対象としているか、内容にはどのようなものがあるかといったものを調べた研究はなく、さらに支援の方向性を決定する中心にある在宅療養者を対象とした研究の動向を調査した研究もなかった。そのため、在宅看護領域における研究がどのような対象・方法で行われているかを概観し、その中でも支援の方向性を決定する在宅療養者を対象とした研究にはどのような内容があるかを知ること、今後の在宅看護領域の研究の示唆が得られると考え検討を試みた。

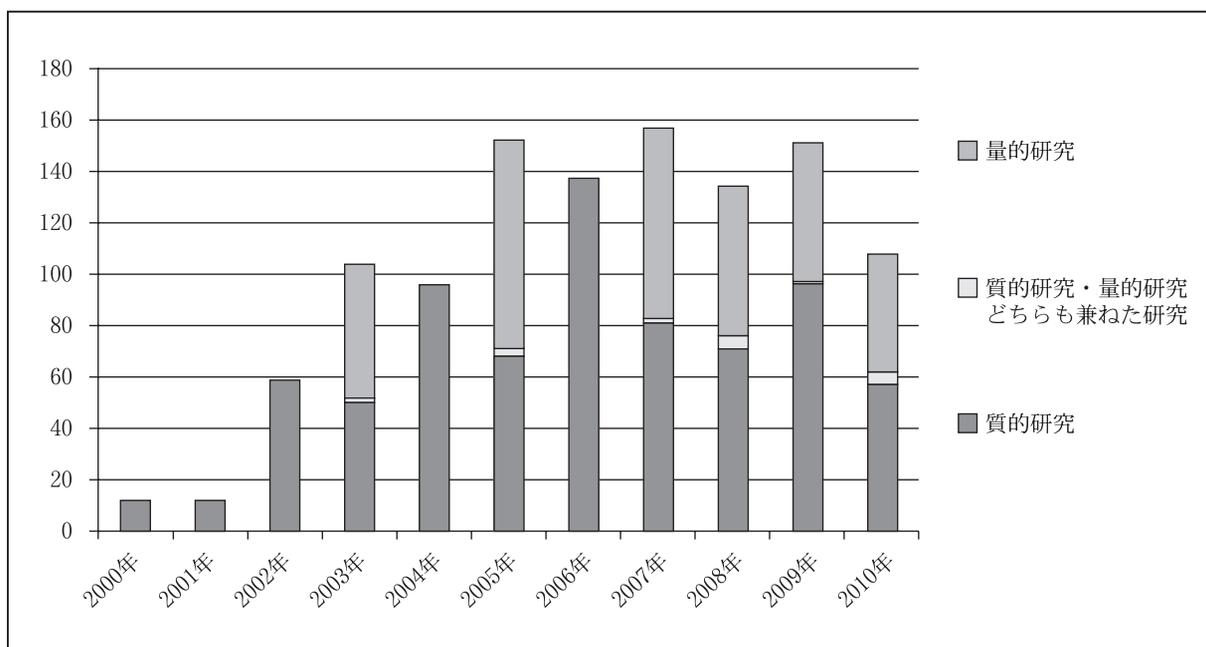


図1 在宅看護領域における原著論文の研究手法別年次推移 (n=1,122)

【方 法】

1. 対象：医学中央雑誌 Web (Ver.5) により、『在宅看護』のキーワードを使用し2000年-2010年で検索される原著論文1,122件を分析対象とした。
2. 分析方法：得られた文献を研究数の年次推移、研究方法、研究対象の視点から分類し、その中で今回は在宅療養者のみを対象としている研究を抽出して研究内容の視点から分類し、概要をまとめた。研究内容の分類は研究タイトル、抄録を読んだ上で、研究者がその論文の主題と感じた内容に焦点を当て類似性の高い内容に分類した。また分類において抄録でははっきり分類できないもの、分類するうえで代表的だと考えられる文献については本文をとりよせて確認した。

【結果および考察】

1. 研究数の年次推移
医学中央雑誌 Web(Ver.5) を使用し、

2000-2010年の期間で『在宅看護』のキーワードにより検索される原著論文1,122件の年次推移を図1に示した。2000年、2001年の研究数はともに12件であった。しかし、2002年には59件、2003年には100件を超え、2005年以降は毎年100件をこえる研究が発表されている。この背景には、看護系大学や大学院の設置が進むのと同時に、2000年に施行された介護保険法が大きな要因になっていると考えられ、訪問看護ステーションの設立の増加、それに伴う訪問看護師数の増加が在宅看護領域における研究のニーズが高まったためと考えられる。

2. 研究方法による分類

質的研究、量的研究、質的研究と量的研究のどちらも同時に行った研究という3種類に分類し結果を図1に示した。その結果は、質的研究が575件、量的研究が530件とほぼ同数であった。また、質的研究と量的研究のどちらも行った研究は17件となっていた。毎年ほとんど同数の研究がなされているが、2005年以降は質的研究が多くなってきている。

3. 研究対象別分類

研究対象別分類は、各論文が研究対象としている人と人以外で分類された。人を対象とした研究は多く、1,122件中1,049件であった。残りの73件が社会資源・文献・その他を対象とした研究であった。

人を対象とした研究には、「在宅療養者」、「家族」、「看護師」、「看護師以外の専門職種」、「学生」、「その他」という対象者の6つの属性で分類することができ、これらを対象とした研究は791件あった。また、「在宅療養者と家族」、「在宅療養者と看護師」といった複数の属性を対象とした研究が258件あった。

単体の属性を対象とした研究の分類を図2に示した。看護師を対象とした研究が最も多く361件あり、看護師の内訳としては、訪問看護師(267件)、病院で働く看護師(39件)、保健師(2件)などを対象としたものが含まれていた。

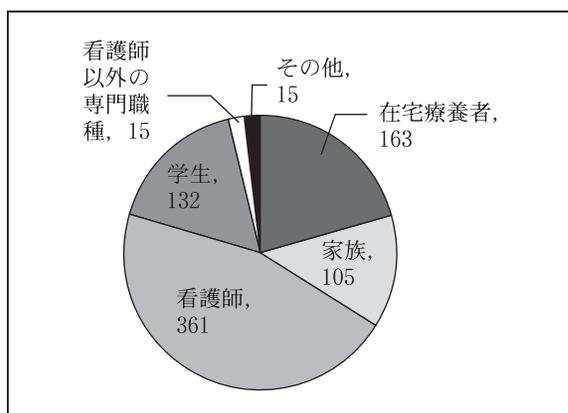


図2 単体の属性を対象とした研究 (n=791)

次に在宅療養者を対象としたものが163件であり、看護の対象である在宅療養者への関心が高いことが理解できる。学生を対象とした研究も132件と多く、在宅看護学の教育効果を見た研究となっていた。家族を対象とした研究も105件と多い。また、看護師以外の専門職を対象とした研究は15件あり、その内訳は、ケアマネージャー(7件)、医師(4件)、介護福祉士(4件)となっていた。

看護師、在宅療養者、家族を対象とした研究が多数を占めており、在宅看護実践の場での3者の重要性を示している。なかでも、看護師を対象とした研究が突出して多く、今後は看護の対象者である在宅療養者や家族を対象とした研究をより行っていき、知見を深めることで、現在の看護の見直しや検討がなされ、看護師を対象とした研究もより充実したものになると考えられる。

複数の属性を対象とした研究には、属性単体で見た対象のすべての組み合わせが存在していたが種類が多く結果が見えにくくなるため図3のように分類した。

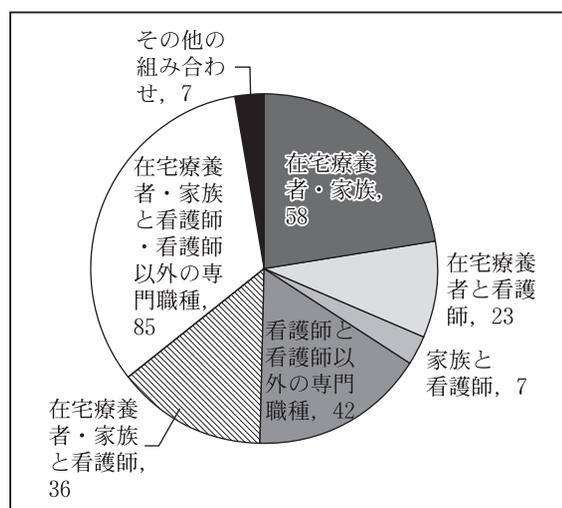


図3 複数の属性を対象とした研究 (n=258)

最も多いのは「在宅療養者・家族と看護師・看護師以外の専門職種」で85件あった。多くの属性を一度に対象者としたこの組み合わせには事例検討が多く含まれている。次いで「在宅療養者・家族」が58件と多く、次に「看護師と看護師以外の専門職種」が42件となっている。また、「在宅療養者と看護師」が23件、「家族と看護師」が7件、「在宅療養者・家族と看護師」36件であり、訪問看護が展開される自宅で接する3者を取り扱った研究もあった。

これら複数の属性を一度に取り扱った研究が多い背景には、在宅療養に関わる複数の

人々の認識や思いが異なるためと考えられる。本田ら²⁾は訪問看護師は在宅療養者や家族、医師や他職種らの対話を促進するという働きかけを行い、それぞれの認識のずれへの気づきを促すよう支援していると指摘しており、複数の人に関わることへの関心の高さを示している。

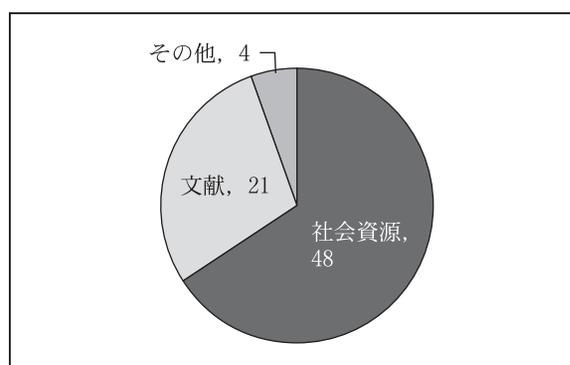


図4 社会資源・文献・その他を対象とした研究（n=73）

社会資源・文献・その他を対象とした研究の内訳を図4に示した。社会資源には、過疎地に住む在宅療養者に対して提供される映像通信システムなどのITシステムを対象としたもの（13件）や、病院内の地域連携室などの退院支援を行う部署を対象としたもの（10件）、グループホームなどの居住系サービスを提供する施設を対象としたもの（8件）が含まれていた。また、原著論文で検索したが、文献を研究対象としている研究も22件検索された。

4. 在宅療養者を対象とした研究の内容別分類

研究内容別の分類は大きく2つに区分できた（表1参照）。分類は大きく①「サービスの利用に焦点をあてない在宅療養者の生活」（16件）と②「サービスを利用する在宅療養者の生活」（147件）となり、サービスを利用しながら在宅療養を行っている状況への関心が高いことが示された。以下は各研究内容別分類詳細に沿って動向をまとめていく。

①「サービスの利用に焦点をあてない在宅

療養者の生活」とは、在宅療養者の利用しているサービスには焦点をあてず在宅療養者の生活や体験を調査した研究で「在宅療養者が主観的にとらえている自らの生活」や「在宅療養者の予後の予測とその対処」に分類できた。

「在宅療養者が主観的にとらえている自らの生活」とは、在宅療養者が療養生活の中でどのような生きがいや、楽しみ、不安や苦しみ、何に価値を置いているかなどを調査したもので、工藤³⁾らの研究では在宅療養者の楽しみについてインタビュー調査を行っており、楽しみを構成する要素や心身の安定した生活が楽しみを支え、加齢や病気に関連した体力低下・身体障害による生活のしづらさなどが楽しみを減少させていることを明らかにしていた。

また、その他に訪問看護を拒否する在宅療養者の要因や在宅療養者が体験している困難の要因などがあり、在宅療養者の特徴を明らかにしてケアやサービスに生かそうという研究がみられた。

「在宅療養者の予後の予測とその対処」は在宅療養者の予後を予測できるような要因を調査したもので、榎⁴⁾らは在宅療養者の栄養状態から見た生命予後を予測するためには、BMIと上腕三頭筋皮下脂肪厚（TSF）の2つの指標を組み合わせることでより高い死亡率が予測されることを報告し、スクリーニングシートの作成により低栄養者のハイリスク者の拾い出しを有効に行うことができることを示唆していた。

また、その他は在宅療養者の転倒リスクの予測や、寝たきりになる要因を量的に調査したものであり、在宅療養者の将来を予測し、それに対応したケアの提供ができることを目指した研究が多くあった。

②「サービスを利用する在宅療養者の生活」は、在宅療養者が訪問看護やその他の在宅

サービスを利用している状況を前提としている研究で「アセスメントツールの検討」「ケアに対する満足度」「看護ケアの介入とその効果」「在宅療養者がとらえた看護」「看護以外の在宅サービスの利用とその効果」「災害対策」「在宅療養を継続する要因」「在宅療養者が使用する医療材料の処理状況」「在宅療養者のケアに対する要望」「事例を通じた看護の振り返り」「療養生活におけるケア内容の実態」に分類できた。

「アセスメントツールの検討」は在宅療養者に適応できる評価法、尺度の作成やその有効性について検討したもので、大野⁵⁾らは在宅領域における褥創管理の難しさを考慮し、介護状況アセスメントシートを作成し、その結果をブレイクスケールに加えて在宅での褥創発生を予測できるものとした。さらに介護状況アセスメントシートの結果から介護サービスの利用や生活保護などの社会資源の利用といった社会支援の目安となるアルゴリズム表を作成し、これらの利用により褥創の改善に役立たせることができたと報告している。その他の研究もアセスメントシートを作成し、看護の実施や評価に用いようとする研究が行われている。

「ケアに対する満足度」は在宅療養者に提供される看護ケアに対する満足度を調査したもので、平川⁶⁾らは訪問看護利用者に対し独自に作成したアンケート調査用紙を用いて満足度調査を行っている。その結果8割以上の人が満足していると答えているが、看護師が行う他職種との連携に対する満足度が低かったことや看護に対する満足度を問う質問の一部が訪問看護利用者にとって適したものではなかったこと報告している。その他の研究でも訪問看護利用者の満足度調査に適したツールはなく、在宅療養者の満足度を構成するものは何かといった研究が行われる必要があると考えられた。

「看護ケアの介入とその効果」は在宅療養における看護上の問題点を指摘し、それを解決するための介入方法を実施し、その効果について検討したもので、新野⁷⁾らは在宅酸素療法を導入し在宅移行後に困ると考えられる酸素吸入量や呼吸困難時の対応、水分摂取など日常生活で気をつけることといったテストを実施し、その結果に合わせた情報提供が行えるようクリニカルパスを改良しその効果を報告している。その他の研究では、ラップ療法や誤嚥予防指導の効果などを検証しており、実施された研究と同じような問題に直面し何らかの介入が必要な時に有効な知見になると考えられた。

「在宅療養者がとらえた看護」は在宅療養者が提供される看護ケアをどのようにとらえたかを調査したもので、千田⁸⁾は在宅脳卒中障害者のリハビリテーションの体験を明らかにし、訪問看護師がその場に【存在すること】と【私のためのケア】や【必要な情報の提供】を行ってくれることで機能回復意欲を促進するケアとなっていることを述べている。

「看護以外の在宅サービスの利用とその効果」は、看護以外の専門職種が提供する患者へのサービスの利用状況やその効果を調査したもので、石脇⁹⁾らが在宅のALS患者に対して意思伝達装置としてのパソコンを障害が強くなる以前に導入することで得られた結果を報告している。他の研究もホームヘルプサービスやリハビリなどサービスの導入がどのように効果があったかを検証しているものであった。「災害対策」は在宅療養者と訪問看護師が検討した災害対策を報告したもので、岡田¹⁰⁾らが医療依存度の高い在宅療養者らに対して避難所を決定し、実際に搬送を行ってみることで搬送に必要な物品や方法が具体的に検討できたことを報告している。

「在宅療養を継続する要因」は在宅療養者が在宅療養を継続している要因や継続するた

めに実施した看護ケアを調査したもので、佐々木¹¹⁾らは在宅療養者が希望する死亡場所と実際に死亡した場所を検討している。その結果、訪問看護師が把握しているほど在宅療養者は希望した場所で亡くなっているという結果が出ていることを報告している。また、泉¹²⁾らは在宅での死亡ではなく在宅療養が継続できなくなり入院に至った理由を調査している。病状の悪化が原因で、生命の危機に直結するような症状が出現することや新たな症状の出現により日常生活自立度が低下し、介護者の受け入れが心身ともに整っていない状況があることを報告している。その他には在宅呼吸器療法、酸素療法を行っている患者に対し在宅療養が継続できている要因を質的に調査したものと単純に訪問看護の導入により入院回数が減少したことを調査したのもあった。

「在宅療養者が使用する医療材料の処理状況」は在宅療養者が使用している医療材料がどこから提供され、どのように処理しているかを実態調査したもので、前田¹³⁾らは、吸引カテーテルなどの医療材料や、ガーゼなどの衛生材料の提供状況、滅菌物の保管や滅菌の実施者、それらの物品の廃棄されている状況を報告していた。

「在宅療養者のケアに対する要望」は在宅療養者が訪問看護などの療養生活を支えるサービスに求める要望を調査したもので、川西¹⁴⁾らは独自に作成したアンケート用紙を用いて、難病患者に対して不安や要望を調査している。その結果要望には緊急入院できる

医療施設の確保や24時間いつでも連絡が取れることなどがあり、不安には介護する人がいないことや介護する人が大変、吸引ができないなどを報告している。

在宅療養者の要望を調査した研究はその他にもアンケートを使用した研究があるが、使用するアンケートの信頼性を検討したものはなかった。また、質的な調査もあるが、事例検討であり、在宅療養者の要望はどのようなものがあるかという把握には至っていない。そのため在宅療養者の要望にはどのようなものがあり、それには何が関わっているかなどのより内容を深めた研究が今後必要だと考えられた。

「事例を通した看護の振り返り」は事例を振り返ることで効果的だったと考えられる看護介入を検討したものであり、リウマチがあるにもかかわらずストーマを自己管理しなければならなかったケースやALSであり呼吸器装着の意思決定までに多くの葛藤があったケースなど困難事例を振り返り実施した看護の検討がなされていた。

「療養生活におけるケア内容の実態」では在宅療養者の療養生活や利用しているケアの内容やその効果を調査したもので、森¹⁵⁾らが吸引カテーテル管理方法と口腔ケアの実態と洗浄液・浸漬液や歯垢からの菌検出の調査を実施し、在宅での口腔ケアや吸引カテーテルの管理の再検討の必要性を報告している。その他の研究には在宅療養者からの緊急コールの実態報告など現在行われている看護ケアの実態とその効果を検証したものであった。

表1 在宅療養者を対象とした研究の内容別分類の詳細

内容	内容詳細	タイトル	研究者	掲載雑誌	発行年
①サービスの利用に焦点をあてない在宅療養者の生活	在宅療養者が主観的にとらえている自らの生活	高齢関節リウマチ患者の体験とそのプロセス	坂哉繁子	獨協医科大学看護学部紀要 1 巻 Page49-59	2008
		在宅酸素療法下にある独居患者の療養生活上の困難とその対処	糸長由希子、土居洋子、竹川幸恵	日本呼吸管理学会誌15巻 4 号 Page629-634	2006
		在宅療養中の終末期がん患者の思い 3 例の終末期がん患者を通して	安井真由美、海老真由美、村山正子	日本地域看護学会誌 7 巻 1 号 Page49-54	2004

①サービスの利用に焦点をあてない在宅療養者の生活	在宅療養者が主観的にとらえている自らの生活	在宅療養中の要介護高齢者の楽しみを構成する要素 訪問看護ステーションを利用している高齢者のインタビュー結果から	工藤節美、屋田みゆき、木下結加里	看護技術54巻 8 号 Page851-856	2008
		中市地域に住む在宅障害高齢者の生きがい意識	阿南みと子、佐藤鈴子	日本看護学会論文集：地域看護35号 Page12-14	2005
		電話訪問における癌患者の退院後の不安	清水倫子、緒方周江、秋山真美	日本看護学会論文集：看護総合37号 Page328-329	2006
		統合失調症患者における精神科訪問看護受け入れ拒否の要因	赤平雅子、大山一志、藤井博英	日本看護学会論文集：精神看護38号 Page93-95	2007
		難病療養者の思いをより理解するために 生活の質評価法 SEIQoL-DW を使用して	中村昌代、額賀せつ子	難病と在宅ケア15巻11号 Page53	2010
		訪問看護サービスを利用する一人暮らし高齢者の生活感情に関する研究	松坂由香里	日本地域看護学会誌 6 巻 2 号 Page86-92	2004
		訪問看護とホームヘルプサービスの利用に影響を及ぼす要因	チェ・ジョンヒョン、村嶋幸代、堀井とよみ	日本公衆衛生雑誌49巻 9 号 Page948-958	2002
		訪問看護における「病いの語り」 利用者のナラティブを通して病いの体験に触れた 1 事例	白石賢吾	日本精神科看護学会誌53巻 3 号 Page248-252	2010
		訪問看護師が感じた利用者の「もてる力」	濱田淳子、與那覇五重	日本精神科看護学会誌52巻 2 号 Page332-336	2009
		在宅療養者の予後の予測とその対処		在宅脳血管障害者が寝たきり状態になる時期と要因	加藤基子
日本において訪問看護サービスを受けている地域在住高齢女性における転倒恐怖(Fear of Falling among Community-dwelling Elderly Women Receiving Visiting Nursing Services in Japan) 英語	TakaiKiyako, HondaSumihisa, YeZhaojia, 他			Acta Medica Nagasakiensis52巻 1 号 Page7-11	2007
訪問看護サービス利用者の身体計測指標と生命予後について the Nagoya Longitudinal Study of Frail Elderly(NLS-FE)より	榎裕美、葛谷雅文、益田雄一郎			日本老年医学会雑誌44巻 2 号 Page212-218	2007
訪問看護ステーションにおける利用者の死亡要因についての前向き研究	松田明子、九里美和子			日本在宅ケア学会誌10巻 1 号 Page84-91	2006
②サービスを利用する在宅療養者の生活	アセスメントツールの検討	COPD 患者の ADL 評価について 在宅訪問指導に適した ADL 評価表の検討	土橋真由美	弘前大学医学部保健学科紀要 3 巻 Page41-49	2004
		セルケア評価表を訪問看護に生かす	吉福育代、赤池早苗、池野正子	日本精神科看護学会誌49巻 1 号 Page228-229	2006
		神経難病患者に対する訪問看護のアウトカム評価	高橋陽子、内田陽子、河端裕美	The Kitakanto Medical Journal60巻 3 号 Page251-257	2010
		通院患者の服薬アセスメント指標の作成と有用性に関する研究	湯沢八江	お茶の水医学雑誌50巻3号 Page133-143	2002
		褥瘡の発生予防と治療に関する研究 在宅看護編	大野かおり、那須則子、武田弘美	看護技術48巻14号 Page1723-1728	2002
ケアに対する満足度		在宅における看護の質の向上を目指して 利用者・家族への満足度調査	平川泰子、佐合由美子、伊佐次小百合	日本看護学会論文集：地域看護39号 Page33-35	2009
		在宅移行期における悪性疾患終末期患者の QOL	島田麗子、大江美樹	地域医療第44回特集 Page267-270	2005
		利用者満足度を高めるための在宅ケア内容に関する研究	難波貴代	日本保健福祉学会誌12巻 1 号 Page13-22	2005
看護ケアの介入とその効果		「在宅介護スコア」の合計点が低得点にもかかわらず長期在宅介護が可能であった症例の臨床的検討	木村恵美子、黒沢佳子、久保田明子、他	群馬医学81号 Page99-101	2005
		【腹膜透析の進歩 2005】 高齢者 PD 患者受け入れ 2 年目を経ての今後の展望 高齢 PD 患者との関わりを通して	富田ゆかり、鹿野里実、秋元朋子	腎と透析58巻別冊 腹膜透析の進歩2005 Page215-221	2005
		ターミナル期で褥瘡を有する在宅患者へのラップ療法の効果 日本褥瘡学会による DESIGN 評価を用いて	小藪美鈴、前山シツ子、荒井久美子	ナーシング27巻 4 号 Page106-111	2007
		リスクアセスメントによる褥瘡ケアの効果 考案した記録用紙の活用事例を通して	岡由美子、田中恵子、西村康子	公立豊岡病院紀要18号 Page35-38	2007
		胃瘻からの固形化栄養注入の取り組み	阿蒜ひろ子、小沼康子、前島牧子	日本看護学会論文集：地域看護36号 Page222-224	2006

②サービス を利用する 在宅療養者 の生活	看護ケアの介 入とその効果	介護者の視点から考えた退院指導の一考察 訪問看護に同行して	鈴木涼子、中村千秋、笹木三津子	日本看護学会論文集：地域看護39号 Page86-88	2009
		外来透析患者に対する訪問看護の臨床的意義 臨床的パラメーターの評価を中心に	梅木いずみ、大山美津恵、深尾涼子、他	日本透析医学会雑誌35巻10号 Page1333-1336	2002
		気管切開下 ALS 在宅人工呼吸療法施行中の排痰困難に対する MI-E(MAC)導入に関する検討	中山優季、水野、小倉朗子、小西かおる	日本呼吸ケア・リハビリテーション学会誌16巻2号 Page339-344	2006
		気管切開後の喀痰管理に対しSBバックが有効であった訪問看護の一例	山下みき、寒川晴美、三好千智、他	地域医療第44回特集 Page501-502	2005
		後期高齢者の在宅復帰をめざして 退院前・後訪問の成果	富迫ゆみこ、佐藤ひとみ、閑地敦子	北九州八幡東病院研究紀要1巻1号 Page10-13	2006
		誤嚥予防指導を受け自宅退院した患者のコンプライアンスの実態	山本麻美、長谷奈緒美、岩井美知代	日本看護学会論文集：老年看護34号 Page51-53	2004
		高齢者在宅療養患者・家族への糖尿病食事指導「栄養バランス表」の実用性について	佐藤厚子、李相潤	Health Sciences20巻2号 Page155-165	2004
		高齢腹膜透析患者の地域連携バスによる継続看護の充実を試みて 地域連携バスの有用性の検討	高橋八千代、金澤綾乃、山口あずさ	腎と透析63巻別冊 腹膜透析2007 Page227-230	2007
		在宅で健康維持・管理が困難な高齢者への支援の試み 外来における健康維持・管理スクリーニングシートを活用しての効果	永窪佳子、栗田晴子、鍛冶谷万里	日本看護学会論文集：地域看護37号 Page77-79	2007
		在宅における介護予防のためのフットケア効果	山下妙子、田中久美子、中井萬寿美	愛仁会医学研究誌41巻 Page95-96	2010
		在宅における経腸栄養剤固形化投与の実際と効果	坂本由規子、古林典子、濱田照代	訪問看護と介護10巻7号 Page581-585	2005
		在宅医療における褥瘡ケアにクリティカルパスを使用した効果	都直人、内田晴江、岩下由加里	ナースデータ24巻11号 Page77-83	2003
		在宅酸素療法導入クリニカルパスを用いた患者教育退院後の理解度の検討	新野久美、小林薫、五十嵐美枝子	Expert Nurse19巻11号 Page126-130	2003
		在宅療養でレクリエーションを取り入れて	雑賀浩子	公立八鹿病院誌16号 Page37-40	2007
		自己管理不良透析患者に対する電話訪問の有効性	西村紀子、櫻井貴子、西村真弓	日本看護学会論文集：成人看護1136号 Page270-271	2005
		受け持ち看護師が退院後地域生活へつなぐため訪問看護を実施しての検討 退院後3週間に焦点をあてて	池田康訓、遠田孝、齋藤敦子	日本精神科看護学会誌53巻3号 Page243-247	2010
		就労継続に「個人 SST」を使用した訪問看護のかかり	広野志代、関菊乃	日本精神科看護学会誌52巻1号 Page144-145	2009
		集中的情報収集の手段としての訪問看護 夜間の行動が不明な独居高齢者への関わり	山脇みつ子	地域医療第44回特集 Page647-648	2005
		重症心身障害児に対する水中運動療法 長期間継続した症例について	桐山剛、中村祐一、小西徹	日本重症心身障害学会誌27巻3号 Page113-116	2002
		寝たきり高齢者の訪問看護における回想法活用の効果	別所遊子、細谷たき子、長谷川美香	日本地域看護学会誌6巻1号 Page25-31	2003
		酢水による経管栄養カテーテルの清潔管理法の効果 在宅での有効な実施をめざして	廣田光恵、菅井るり子、上野和子	新潟県厚生連医誌15巻1号 Page18-21	2006
		精神科訪問看護の効果に関する実証的研究 精神科入院日数を指標とした分析	萱間真美、松下太郎、船越明子、他	精神医学47巻6号 Page647-653	2005
		精神科訪問看護を受けている利用者の変化 主観的ウェルビーイング評価尺度短縮版(SWNS-J)を用いた調査	福岡幸夫、田村実、太田トミ	日本精神科看護学会誌52巻1号 Page418-419	2009
		精神科訪問看護利用者の QOL の向上をめざして みんなで行こう、一泊旅行	中井まち子、荒尾小枝子、村松良昭	日本精神科看護学会誌52巻2号 Page342-346	2009
		対人関係面にレベル低下がみられたグループホーム入居者へのアプローチ SST を実施して	水上美鶴、南部英則、船場広美	日本精神科看護学会誌45巻2号 Page360-364	2002
		退院前訪問指導を実施した患者の在宅生活状況調査 VAS と BI・FIM 測定を用いて	肴倉厚子、青木敏子、木村みどり	日本リハビリテーション看護学会学術大会集録14回 Page10-12	2002
		統合失調症患者へ患者主体の服薬自己管理プログラムを取り入れた援助 看護師と患者の共同作業の場面を振り返って	岸本和巳、香西保宏	日本精神科看護学会誌52巻2号 Page465-469	2009

②サービスを利用する在宅療養者の生活	看護ケアの介入とその効果	訪問におけるレクリエーション	藤田展子、磯辺恵理子、森川恵	理学療法福岡15号 Page74-76	2002
		訪問看護サービス利用者におけるアロマセラピーのリラクゼーション効果	園中希依子、清本悟、柏内美香、他	日本看護学会論文集：地域看護39号 Page197-199	2009
		訪問看護師の脳血管疾患患者の状態予測と予測達成に関わるケア	別所遊子、細谷たき子、長谷川美香	日本看護研究学会雑誌27巻5号 Page65-71	2004
		訪問看護中の精神分裂病患者の食行動・食態度の積極性が自我の回復をもたらす効果	田邊裕子、柴田綾子、吉井芳江	日本精神科看護学会誌45巻1号 Page127-130	2002
		訪問看護利用者2事例に対する療養通所介護の試み ケア内容と利用者の表情および意識	河野あゆみ、岡本双美子、村田瑞穂	日本在宅ケア学会誌12巻2号 Page52-59	2009
		訪問看護利用者の腹臥位療法からのQOL(生活の質)の向上 俳句を通じた利用者の心の変化を探る	石井英子、山田裕子、加藤しのぶ	医学と生物学152巻6号 Page239-245	2008
		離床への意欲を無くし、ほぼ終日床上で過ごす対象者との関わり ナラティブアプローチを用いて	大西さつき、西谷裕美子、佐藤智子	公立八鹿病院誌18号 Page61-63	2009
		老年期精神疾患患者のQOL向上への援助 他科受診における自己決定を支援する	八田由利子	日本精神科看護学会誌51巻3号 Page392-396	2008
	在宅療養者がとらえた看護	在宅脳卒中障害者の機能回復意欲を促進する訪問看護	千田みゆき	保健の科学47巻4号 Page307-312	2005
	看護以外の在宅サービスの利用とその効果	ALS患者が意志伝達装置を早期に導入する効果	石脇敬子、山田明子	日本看護学会論文集：成人看護II36号 Page145-147	2005
		デイケア(サービス)利用と上腕筋面積との関連 the Nagoya Longitudinal Study of Frail Elderly (NLS-FE)より	榎裕美、平川仁尚、井澤幸子	栄養・評価と治療24巻6号 Page558-562	2007
		肝癌の在宅末期医療	竹越國夫	日本在宅医学会雑誌2巻1号 Page39-42	2000
		精神科訪問看護のホームヘルパー導入におけるケアの実際	野坂幸江、久保弥生、田嶋長子	福井県立病院看護部研究発表集録平成19年度 Page30-35	2007
		退院後の自宅ADLの変化 回復期リハビリテーション病棟退院者のFIMMに注目して	正垣幸、池口裕子、西村千恵美	公立八鹿病院誌18号 Page57-59	2009
		病院から在宅へ よりよいソフトランディングを目指して	好川哲平	昭和病院雑誌4巻1号 Page23-25	2008
		訪問リハビリにおけるチーム連携の検討	中野栄子、片山后代、中村くるみ	北海道勤労者医療協会看護雑誌30巻 Page40-42	2004
	災害対策	医療依存度の高い在宅療養者の防災における危機管理意識の向上 避難移送シミュレーションを実施して	岡由美子、西村康子、津瀬鹿篤子	訪問看護と介護14巻1号 Page56-61	2009
	在宅療養を継続する要因	高齢者の在宅療養生活継続に関連する要因の分析 在宅酸素療法・在宅人工呼吸療法患者と訪問看護	日比野直子、土平俊子	三重県立看護大学紀要11巻 Page31-38	2008
		在宅療養が継続できず、病棟で看取りにいたった症例の検討	松延理恵、川二美、佐伯尚美	訪問看護と介護14巻2号 Page154-157	2009
		在宅療養を継続できている要因 介護の様子から	阿部弘美、笹谷孝子、高正麻紀	旭川厚生病院医誌17巻1号 Page23-25	2007
		終末期の悪性腫瘍患者が在宅生活を継続できない要因	泉江里子、猪鹿倉友子、菅井亜由美	日本看護学会論文集：地域看護38号 Page12-14	2008
		精神障がい者を支援する継続看護の在り方 単身精神障がい者への地域生活援助をとおして	川口真裕美、木下公子、東英敏	日本看護学会論文集：地域看護36号 Page49-51	2006
		単身の精神障がい者を支える訪問看護 地域生活を支援する継続看護をとおして	川口真裕美、木下公子、東英敏	大阪府立精神医療センター紀要16巻 Page26-29	2006
		地域基幹病院・相談事業科での在宅療養支援の実態 介護保険開始後一年間の実態調査より	尾世由美子、小島京子	広島県立病院医誌34巻1号 Page159-162	2002
		調査研究 地域生活支援 入院医療中心から地域医療中心に向けて 訪問看護のデータを分析してみたこと	宮本貴裕	正光会医療研究会誌4巻1号 Page40-46	2007
		当院における在宅死増加の要因 在宅死16例と非在宅死5例の相違	中野りか	幌南病院医学雑誌2巻1号 Page26-29	2005
		当院訪問看護センターにおける在宅ターミナルケアの実際 在宅死が実現できる条件とは	中野りか	日本看護学会論文集：地域看護34号 Page27-29	2004

②サービスを利用する在宅療養者の生活	在宅療養を継続する要因	訪問看護の効果と可能性 訪問看護は再入院を予防できるか	前野紀子、伊東知津子、鈴木真理子	日本精神科看護学会誌49巻1号 Page158-159	2006
		要介護高齢者における死亡場所の希望と実際 訪問看護師による把握	佐々木恵、新井明日奈、荒井由美子	日本老年医学会雑誌45巻6号 Page622-626	2008
	在宅療養者が使用する医療材料の処理状況	在宅における医療・衛生材料等の入手・保管・廃棄方法の実態 感染管理を必要とするケアに焦点をあてて	前田修子、滝内隆子、中山栄純	訪問看護と介護9巻2号 Page128-134	2004
		静岡県の訪問看護ステーション利用者における在宅医療廃棄物処理の現状	平井栄利子、井上久美子、矢野久子	医療廃棄物研究15巻2号 Page139-147	2003
	在宅療養者のケアに対する要望	CAPD療法導入期における患者支援 家庭訪問を活用して	斉藤美保子、星野まり、清水美香	腎と透析65巻別冊 腹膜透析2008 Page134-136	2008
		在宅の独居高齢者ストーマ造設患者特有のニーズ	吉田和枝	東海ストーマリハビリテーション研究会誌24巻1号 Page122-125	2004
		在宅酸素療法患者の緊急時における連絡方法	井上めぐみ、太田智栄、森田ユリ	日本赤十字社和歌山医療センター医学雑誌21巻 Page55-58	2004
		在宅人工呼吸器療法実施中のALS患者の医療・福祉サービス選択における自己決定の支援 介護保険、医療保険、支援費制度による複数サービス利用の事例分析を通して	小林明子	日本難病看護学会誌8巻3号 Page304-313	2004
		事例からとらえた訪問看護の方向性 高齢期にある在宅酸素療養者の事例から	小路ますみ、松原まなみ、淵野由夏	福岡県立大学看護学部紀要2巻1号 Page11-19	2004
		精神科訪問看護に対する利用者の思い	菅原由紀子	日本看護学会論文集：精神看護38号 Page182-183	2007
		難病患者の気管支吸引の実態および在宅療養に対する要望と不安	川西千恵美、細川千恵美、藤本藤枝	日本看護学会論文集：地域看護37号 Page68-70	2007
		訪問看護における精神科リハビリテーション 社会参加をめざしたグループ援助の試み	笠原智代、塩谷里美、青木初江	日本精神科看護学会誌52巻1号 Page226-227	2009
	事例を通じた看護の振り返り	【腹膜透析の進歩 2005】 高齢者 高齢PD患者に対する訪問看護の利点と問題点	五十嵐悠紀、和田朋子、奥村良子、他	腎と透析58巻別冊 腹膜透析の進歩2005 Page222-225	2005
		NPPVを実施しているデュシェンヌ型筋ジストロフィー療養者における腹部症状と看護	大竹しのぶ、黒田雅枝、小倉朗子、他	日本難病看護学会誌14巻2号 Page154-158	2009
		ストーマリハビリテーションの変貌とその対応 オストメイトの継続的ケアの諸問題	武田信子	日本ストーマリハビリテーション学会誌20巻1号 Page14-18	2004
		過疎地域における精神障がい者の生活を支える精神科訪問看護師の看護援助 非定型精神病患者への関わりを通して	坂本由美、森康成、村岡大志	日本看護学会論文集：精神看護38号 Page184-186	2007
		筋萎縮性側索硬化症(ALS)療養者の人工呼吸器装着の意思決定過程と支援のあり方に関する検討	松田千春、小倉朗子、友松幸子	日本難病看護学会誌11巻3号 Page209-218	2007
		軽度の認知症を伴う透析患者の一人暮らしへの支援 家族とのかかわりで学んだこと	江崎アサ子	腎と透析63巻6号 Page898-900	2007
		行動変容を継続するための信頼関係形成の大切さ 訪問看護の指導を通じて	武石希	長岡看護福祉専門学校紀要4号 Page99-101	2008
		高齢者の大腿骨頸部骨折患者が自宅退院できたケースを振り返って 大腿骨頸部骨折手術後患者2事例を通して	佐々木智世佳、北川裕子、渡辺晶子	砂川市立病院医学雑誌24巻1号 Page55-57	2007
高齢者の腹膜透析導入から在宅へ 充実したCAPD生活		三島紀子、亀畑祥子、池村夕子	腎と透析66巻別冊 腹膜透析2009 Page457-458	2009	
在宅での最期を強く希望して 在宅移行後の訪問看護師としてのかかわり		日野紀子	臨床今治22巻1号 Page79-82	2009	
在宅における嚥下訓練への取り組み 下咽頭癌手術で喉頭を温存した一事例を通して		下地恵子、砂川直子、大城和江	日本リハビリテーション看護学会学術大会集録14回 Page37-39	2002	
在宅生活を支えたりハビリテーション看護の実践 訪問看護で高齢者のADLが向上した事例から		佐藤典子、片桐恵美子	日本リハビリテーション看護学会学術大会集録20回 Page43-45	2008	
在宅部門で関わっているデュシェンヌ型筋ジストロフィーの1例	曾根順子、中原英幸、鈴木伸治	山梨医学35巻 Page53-55	2007		

②サービスを利用する在宅療養者の生活	事例を通じた看護の振り返り	重症脊髄損傷者の在宅療養におけるケアマネジメント ニーズに合わせることの重要性	田場真由美、當山富士子	沖縄県立看護大学紀要 4 巻 Page66-73	2003
		障害受容における患者の意識変化と家族関係の一考察 在宅への移行期にある高齢患者への支援	中山亜弓	新見公立短期大学紀要28 巻 Page53-57	2007
		人生の歩みに基づく対象理解に着目した家庭訪問援助に関する研究	丸谷美紀	千葉看護学会誌10巻 2 号 Page17-24	2004
		生きていく苦痛を訴える利用者への訪問看護 協働的にかかわりを試みて	谷藤伸恵	日本精神科看護学会誌53 巻 3 号 Page19-23	2010
		生活全般に不安の強い精神疾患を持つ利用者への生活安定への関わり 長期間の入院中から本人のペースに寄り添って	山野内みき	松山記念病院紀要10号 Page70-73	2004
		精神発達遅滞患者の PD 自立に向けての援助	和合裕希子、和田朋子、高橋弥生	腎と透析66巻別冊 腹膜透析2009 Page367-369	2009
		脊柱管狭窄症・頸髄不全損傷を伴う利用者への排泄援助	矢田由美、清水美由起、福田千晴	愛仁会医学研究誌 40 巻 Page346-348	2009
		他者との交流が苦手な(高齢)独居がん患者への訪問看護導入の試み	堀内睦美、鈴木恵、本郷幸子、他	ホスピスケアと在宅ケア 14 巻 1 号 Page50-52	2006
		単身のアルコール依存症者を支える試み アルコール依存症のコミュニティを構築して	南方英夫、村田志保	病院・地域精神医学51巻 2 号 Page150-151	2009
		地域で生活する患者への危機介入の効果 新たな関係づくりをきっかけにして	渋谷順子	日本精神科看護学会誌51 巻 3 号 Page367-371	2008
		長期入院患者に対して看護師の行ったケアリング効果の検討	矢田部愛、明神一浩、一ノ山隆司	日本精神科看護学会誌52 巻 1 号 Page366-367	2009
		当院における高齢者の透析導入	翠川基子	長野県透析研究会誌29巻 1 号 Page40-41	2006
		肘屈曲位のある療養者に対する P 型枕の使用による苦痛の軽減 安楽と身体機能維持の側面から考える	横田亜樹	看護教育49巻 8 号 Page727-730	2008
		病院退院後に義足作成に挑戦し、歩行を再獲得した一症例 全人的な側面からの考察	倉野力、大西敦志	訪問看護と介護13巻 2 号 Page132-134	2008
		不安や焦燥感が強い患者の退院調整 治療環境としての看護	上溝久美子、山本幸子、常清節子	日本精神科看護学会誌49 巻 1 号 Page142-143	2006
		物質関連障害の重複障害例に対する課題の検討 訪問支援を中心とした治療経過から	渡邊敦子、末次幸子、近藤宏	アクションと家族25 巻 4 号 Page319-327	2009
		訪問看護 7 における家屋改修 想いを共有する難しさ	岸郁恵	理学療法歩み18巻 1 号 Page46-51	2007
		訪問看護における褥瘡の現状	梅津由美子、桑原和子	三友堂病院医学雑誌 6 巻 1 号 Page59-63	2005
		訪問看護師が行う盗られ妄想のある患者への援助 薬物療法と並行して	白藤真理	日本精神科看護学会誌52 巻 1 号 Page228-229	2009
		慢性関節リウマチで手指変形のある患者のストーマセルフケアについて	蟹江香、榊原由美子、大内郁子	東海ストーマリハビリテーション研究会誌25巻 1 号 Page1-5	2005
療養生活におけるケア内容の実態	【腹膜透析の進歩 2005】 高齢者 高齢 PD 患者の在宅支援における訪問看護師の役割	道仙道子、三上裕子、平松信	腎と透析58巻別冊 腹膜透析の進歩2005 Page230-234	2005	
	【慢性期脳卒中のリハビリテーション 現状と問題点】 通所ケアの効果	水尻強志	総合リハビリテーション 30 巻 9 号 Page799-804	2002	
	ALS 在宅療養者への意思伝達装置を用いたコミュニケーション支援の評価	安藤加代、中村妙子、三澤紀子	日本看護学会論文集：地域看護40号 Page190-191	2010	
	アルコール・薬物依存症者に対する訪問看護のあり方に関する一考察 「医療法人せのがわ」における精神科訪問看護の実態調査から	小野誠三、谷口武則、岩井智美、他	日本アルコール関連問題学会雑誌11巻 Page89-97	2009	
	オストメイトに関する地域連携 オストメイトの継続看護に関する医療機関と訪問看護ステーションとの連携	佐藤明代、武田圭佐、相澤友子	日本ストーマ・排泄リハビリテーション学会誌24 巻 3 号 Page143-147	2008	
	ケア期間からみた在宅ホスピスケアの問題 短期間(7日以内)で終了する末期がん患者の在宅ケア	川越厚、松浦志のぶ、染谷康子	癌と化学療法35巻 Suppl.1 Page16-18	2008	
	ストーマ外来と訪問看護サービスとの連携の現状	佐藤文恵	東海ストーマリハビリテーション研究会誌28巻 1 号 Page78-81	2008	

②サービスを利用する在宅療養者の生活	療養生活におけるケア内容の実態	気管内吸引を必要とする長期在宅療養患者に対する感染管理と口腔ケアの実態調査	森みずえ、千田好子、光畑律子	日本環境感染症学誌24巻1号 Page27-35	2009
		高齢患者の退院における看護相談の現状と課題	八島妙子、白井裕子、木村寿美	愛知医科大学看護学部紀要2号 Page67-72	2003
		在宅医療における口腔ケアの臨床的検討	黒沢佳子、久保田明子、野口恵美、他	群馬医学84号 Page145-148	2006
		在宅医療における入浴、シャワー浴、清拭に関する臨床的検討	野田美恵、藤田みゆき、五味美知子	群馬医学78号 Page71-76	2003
		在宅医療における尿路管理の臨床的検討	佐藤千鶴、森山典子、立石正枝、他	群馬医学76号 Page136-140	2002
		在宅酸素療法患者の自立度における実態調査 アンケート調査を実施して	福崎叔子、奥田尚美、西奈文子	香川労災病院雑誌10号 Page149-152	2004
		在宅酸素療法症例における介護保険制度の問題点と対策	廣谷淳、前倉亮治、長濱あかし	日本呼吸器学会雑誌41巻6号 Page377-381	2003
		在宅重症心身障害(者)の訪問事業の現状からみる訪問看護ニーズ	村瀬喜美子、中野悦子、金井伸子	日本重症心身障害学会誌28巻3号 Page211-214	2003
		在宅人工呼吸器を装着した患児のADL拡大へのアプローチ	小笠原保子	癌と化学療法37巻 Suppl. II Page215-217	2010
		指定通院医療機関における診療記録の量的・質的データ分析 医療観察制度による専門的医療向上のためのモニタリング研究	美濃由紀子、岡田幸之、菊池安希子	日本精神科看護学会誌51巻3号 Page475-479	2008
		時間外診療の実態 時間外訪問診療に焦点をあてて	工藤きみ子、苫米地タネ、橘淳子	地域医療第44回特集 Page640-642	2005
		時間外電話相談充実のための効果的な対応方法の検討 K訪問看護ステーションにおける時間外電話相談の実態から考える	大須賀恵子、河崎文美、水野多喜子、他	訪問看護と介護10巻8号 Page659-665	2005
		精神科病棟看護師に求められる退院援助 統合失調症の訪問看護利用終了者を通して	熊谷徹子、小林美奈子	日本看護学会論文集：地域看護38号 Page130-132	2008
		精神障がい者が地域で生活するために 生活支援と地域連携の課題	片桐義晃	日本精神科看護学会誌49巻2号 Page403-407	2006
		精神障害者への訪問看護のかかわり 受け入れ困難事例を通して	田中たか子、重信好恵、菅野恭子	練馬医学会誌15巻 Page44-46	2009
		総武病院における訪問看護 17年間の振り返り	藤本百代、日下部すみ子、加藤由美子、他	社会精神医学研究所紀要32巻1号 Page37-43	2003
		地域における服薬自己管理の充実に関する一考察 外来通院をする統合失調症患者の服薬自己管理と支援の現状	山崎節子、中村勝	日本看護学会論文集：地域看護40号 Page15-17	2010
		中山間地域高齢者の療養場所移行の現状と支援の必要性	牧野鈴美、宮島美枝子、金田順子	日本看護学会論文集：地域看護38号 Page179-181	2008
		島しょに居住する慢性呼吸器疾患患者の在宅療養に関連する要因とQOLに関する研究	石川りみ子、宮城裕子、松田梨奈	沖縄県立看護大学紀要10号 Page1-14	2009
		統合失調症患者の訪問看護に対する希望と生活技能評価との関連	川内健三、近藤香織、鶴沼照子	日本看護学会論文集：精神看護38号 Page179-181	2007
		透析患者の高齢化による問題と対応 高齢透析患者のための地域との連携	藤田せつ子、花岡一成、小坂直之	日本透析医学会雑誌38巻4号 Page256-258	2005
		訪問看護師によるリハビリテーション利用者と理学療法士による利用者との身体的状態の比較	松田明子、九里美和子	日本公衆衛生雑誌52巻2号 Page186-194	2005
		訪問指導事業の計画立案に際しての具体的方法の検討 国民健康保険における疾病構造の分析から	日川幸江、川崎裕美、長原みどり	保健婦雑誌59巻2号 Page144-149	2003
		薬物依存症者を対象とした訪問看護の実態	渡邊敦子、末次幸子、近藤宏	アディクションと家族24巻1号 Page48-58	2007
		要介護度別にみた通所リハビリテーション利用者の介護保険サービス利用状況	西田裕介、大塚祐子、原司	理学療法科学19巻1号 Page37-41	2004
		要介護認定申請者の在宅サービス利用実態について 都市部と中山間部の比較検討(そのI)	岩松珠美、折茂賢一郎	プライマリ・ケア25巻3号 Page218-224	2002
		離島診療所におけるターミナルケア 往診していた患者とその家族のサポート	中川多吉子、毛利梓奈	地域医療第44回特集 Page273-275	2005
		老人入院医療費の地域差に関する検討 今後の在宅看護についての基礎資料として	一原由美子 滝川]	地域環境保健福祉研究6巻1号 Page29-34	2002

【結 論】

現在の在宅看護領域における研究は2003年以降より増加傾向にあり、対象別には在宅看護領域に関わるすべての対象が網羅されている。そのなかでも看護師に対する研究は突出して多い。今後は看護の対象者である在宅療養者や家族を対象とした研究を行い、知見を深めていくことで、現在行われている看護実践の見直しや再検討が進むと考えられ、結果的に看護師を対象とした研究もより充実したものになると考えられる。

在宅療養者を対象とした研究の内容分類から、在宅療養者は様々な症状を抱えながら生活しており ADL レベルも様々な状況であるが、多くは急性期症状がなく、安定した病状で療養していることが示唆された。また、研究内容は実施した看護などサービスの実態やその効果を単純に調べたものが多かった。患者の満足度や療養を継続できる要因などを調査している研究もあるが、多くが独自に作成したアンケートで調査を行っており、信頼性のあるアンケートを検討し再現性を高めた研究が必要だという示唆が得られた。

今後の在宅看護領域における在宅療養者を対象とした研究には、療養生活の質や利用しているサービスにはどのような構造や要因が存在するかを調査する必要がある。それにより在宅療養者が求めている看護やどのような実践がより療養生活の質を高めるかが明らかになり、現在行われている看護ケアの質をより向上させることができると考えられた。

【文 献】

- 1) 清水準一：在宅看護過程展開のポイント．河原加代子．系統看護学講座総合分野在宅看護論．50-53．医学書院．2009
- 2) 本田彰子、岡本有子、伊藤隆子他：在宅療養者および家族と訪問看護師との関係構築に基づく看護実践の構造 在宅療養者の看護支援のあり方を検討するメタ研究．千葉大学看護学部紀要．28号．17-21．2006
- 3) 工藤節美、屋田みゆき、木下結加里：在宅療養中の要介護高齢者の楽しみを構成する要素 訪問看護ステーションを利用している高齢者のインタビュー結果から．看護技術．54巻(8号)．851-856．2008
- 4) 榎裕美、葛谷雅文、益田雄一郎他：訪問看護サービス利用者の身体計測指標と生命予後について．日本老年医学会雑誌．44巻(2号)．212-218．2007
- 5) 大野かおり、那須則子、武田弘美他：褥瘡の発生予防と治療に関する研究 在宅看護編．看護技術．48巻(14号)．1723-1728．2002
- 6) 平川泰子、佐合由美子、伊佐次小百合他：在宅における看護の質の向上を目指して利用者・家族への満足度調査．日本看護学会論文集：地域看護．39号．33-35．2009
- 7) 新野久美、小林薫、五十嵐美枝子他：在宅酸素療法導入クリニカルパスを用いた患者教育 退院後の理解度の検討．Expert Nurse．19巻(11号)．126-130．2003
- 8) 千田みゆき：在宅脳卒中障害者の機能回復意欲を促進する訪問看護．保健の科学．47巻(4号)．307-312．2005
- 9) 石脇敬子、山田明子：ALS 患者が意志伝達装置を早期に導入する効果．日本看護学会論文集：成人看護 II 36 145-147 2005
- 10) 岡由美子、西村康子、津禰鹿篤子他：医療依存度の高い在宅療養者の防災における危機管理意識の向上 避難移送シミュレーションを実施して．訪問看護と介護．14巻(1号)．56-61．2009
- 11) 佐々木恵、新井明日奈、荒井由美子：要介護高齢者における死亡場所の希望と実際訪問看護師による把握．日本老年医学会雑誌

- 誌 . 45巻 (6号) . 622-626 . 2008
- 12) 泉江里子、猪鹿倉友子、菅井亜由美他：
終末期の悪性腫瘍患者が在宅生活を継続で
きない要因 . 日本看護学会論文集：地域看
護 . 38号 . 12-14 . 2008
- 13) 前田修子、滝内隆子、中山栄純他：在宅
における医療・衛生材料等の入手・保管・
廃棄方法の実態 感染管理を必要とするケ
アに焦点をあてて . 訪問看護と介護 . 9巻
(2号) . 128-134 . 2004
- 14) 川西千恵美、細川千恵美、藤本藤枝他：
難病患者の気管支吸引の実態および在宅療
養に対する要望と不安 . 日本看護学会論文
集：地域看護 . 37号 . 68-70 . 2007
- 15) 森みずえ、千田好子、光畑律子他：気管
内吸引を必要とする長期在宅療養患者に対
する感染管理と口腔ケアの実態調査 . 日本
環境感染学会誌 . 24巻 (1号) . 27-35 . 2009